

坊ちゃん



夏目 漱石 (1867-1916)

親 ゆずりの無鉄砲で子どものときから損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の二階からとびおりて一週間ほど腰をぬかしたことがある。なぜそんなむやみなをしたと、聞く人があるかもしれぬ。べつだんに、いくらいばっても、そこらとびおりることはできまい。弱虫や一い。とはやしたからである。小使におぶさって帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいからとびおりて腰をぬかすやつがあるかと言ったから、この次はぬかさずにとんでみせますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフをもらって、きれいな刃を日にかざして、友達に見せていたら、一人が、光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるが、なんでも切ってみせるとうけあった。そんなら君の指を切ってみると注文したから、なんだ、指ぐらいこのとおりだと、右の手の親指の甲をはずに切りこんだ。さいわいナイフが小さいのと、親指の骨がかたかったので、いまだに親指は手についている。しかし傷あとは死ぬまで消えぬ。



庭を東へ二十歩に行きつくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があって、真ん中に栗の木が一本立っている。これは命よりだいじな栗だ。実の熟する時分は起きぬけに背戸をでて、落ちたやつをひろってきて、学校で食う。菜園の西側が



山城屋という質屋の庭つづきで、この質屋に勘太郎という十三、四のせがれがいた。勘太郎はむろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗り越えて、栗ぬすみにくる。

ある日の夕方、折り戸のかげにかくれて、とうとう勘太郎をつかまえてやった。そのとき、勘太郎は逃げみちを失って、一生けんめいとびかかってきた。

む こうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢のひらいた頭を、こっちの胸へあててぐいぐい押ししたひょうしに、勘太郎の頭がすべって、おれの袷のそでの中にはいった。じゃまになって手が使えぬから、むやみに手をふったら、そでの中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐらなびいた。しまいに苦しがつて、そでの中から、おれの二の腕へ食いついた。痛かったから勘太郎を垣根へおしつけておいて、足がらみをかけて、むこうへ倒してやった。

山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分くずして、自分の領分へまっさかさまに落ちて、ぐうと言った。勘太郎が落ちる時に、おれの袷の片そでがもげて、きゅうに手が自由になった。その晩、母が山城屋にわびに行ったついでに、袷の片そでもとり返してきた。

こ のほか、いたずらはだいぶやった。大工の兼公と魚屋の角をつれて、茂作のにんじん畑をあらしたことがある。にんじんの芽がでそろわぬところへ、わらが一面にしていたから、その上で三人が半日、すもうをとりつづけにとったら、にんじんがみんな踏みつぶされてしまった。

古川の持っている田んぼの井戸をうめてしりを持ちこまれたこともある。ふといもうそうのふしをぬいて、深くうめた中から水がわき出て、そこいらの稲に